

化石研究グループの紹介

東海化石研究会

蜂矢喜一郎

〒458-0903名古屋市長区有松愛宕315 はちや歯科

Tokai Fossil Society

Kiichiro Hachiya

315, Arimatsu-atago, Midori-ku, Nagoya 458-0903 (bee-8@xc4.so-net.ne.jp)

はじめに

化石研究グループには地域型グループと都市型グループという大まかな分け方がある。地域型というのは化石の産地、あるいはその地域の博物館などを中心とした地域社会を主な活動拠点とする。そのため研究対象地域は県内か、隣接県ぐらいまでが一般的である。一方、都市型は都市に拠点をおき特定の産地や博物館にそれほどの重心を置かず、その都市からの実際の距離でなく、都市からの移動時間（時間的距離）の制約の中に主な活動範囲をおくグループで、分類群や地質時代によって小グループ化していることが多い。また、会員の居住地が全国に及ぶのも特徴である。

私が籍を置く東海化石研究会は都市型グループの化石研究会としては草分け的な存在である。我々の会を含む都市型グループは、都市の普遍的特質である集約的な人脈と情報量を駆使して、多様な活動内容を長年に渡り継続しているところが多い。そのために各地の都市型グループは、古生物学の先駆的な発見や業績への貢献のみならず、多くの研究者を輩出するという啓発教育組織としての役割も長年に渡って担ってきた。

ここではこのような都市型グループの一例として私たち東海化石研究会の活動を紹介します。なお、本誌52号（蜂矢、1992）において既に当会の紹介を行っているため、ここでは最近の活動を中心に紹介する。

「東海化石研究会」の設立と活動内容

東海化石研究会は1968年に、当時中日新聞社専務をされていた故西沢勇氏が呼びかけの中心となり、東海化石趣味の会（平成6年より東海化石研究会に統一）という名称で設立された。設立当初の名称からも分かるように我々の会は化石が好きであるというアマチュア精神を持った方々なら、どなたでも入会できるという親睦団体である。しかしながら、私たちのここ20年ほどの活動は個人的コレクションの収集というものを第一義的な目的とせず、発見という形での科学、古生物学への参加を無上の喜びとし、できるだけ多くの方々にその感動を分かち合っていたりすることを

表1. “誌上展示会”の詳細。

発行年次	号数	回数	タイトル
1989	35	1	「シヤミセンガイ」
1990	36	2	「クマサカガイ科の貝類」
1991	37	3	「現代と新生代のオウムガイⅠ」
1992	38	4	「現代と新生代のオウムガイⅡ」
1993	39	5	「淡水貝類」
1994	40	6	「中・古生代のイタヤガイ超科」
1995	41	7	「イチョウ」
1996	42	8	「新生代と現代のオキナエビス類」
1997	43	9	「牡蠣（カキ）」
1998	44	10	「ツノガイ」
1999	45	11	「濃尾平野の完新世」
2000	46	12	「浮遊生活者“浮いている生き物たち”」
2001	47	13	「日本の三畳紀の貝類」
2002	48	14	「中国の化石産地事情」
2003	49	15	「日本のジュラ紀アンモナイトⅠ」 (下部ジュラ系)
2004	50	16	「日本のジュラ紀アンモナイトⅡ」 (中・上部ジュラ系) 編集中

目的に会の活動を続けてきた。そのような信条を前提として、以下のような活動を続けている。

- 1) 月例会（これには以下のような年間行事を含む）
 - ①通常の月例会では、会員あるいは招聘講師による講話が主体。
 - ②5月と11月に日帰り巡検。
 - ③8月に観光バスによる一泊二日の宿泊巡検。
 - ④4月29日（祝）に古生物、生物学、地質学等の研究者を招き「化石を語る文化講演会」という普及講演会を中日新聞社と共催で開催（平成15年度で30回目）。
- 2) 「化石の友」の発行（年一回、49号まで出版）

事務所を置く美彩社は印刷会社である。そのため機関紙を含む印刷物の多くはここで制作される。社長であり会員である野々垣勲さんには、図版等の最高の仕上がりを損得抜きでお願いしている。また、モノクロ図版用写真の多くは、私が撮影と引き伸ばしを請け負っている。

機関誌の内容で特筆すべきは投稿記事以外に「誌上展示室」という企画特集が組まれていることである（表1）。本特集は“会員の手元に眠る標本類を用いて何らかの読み物ができれば”あるいは“あわよくば新知見に結びつく標本類を世に出せれば”という思いから当初はスタートした。



図1. 信州新町博物館.

現在では会員の標本のみならず、その特集のタイトルに見合った物であれば会員以外の方のご自宅や博物館、大学などへも出かけて取材をおこなっている。

3) WEBサイトの運営

広報活動と会員の交流を目的に2000年7月に開設したWEBサイトである。矢野一生さんが担当している。

会の案内、出版物の案内、会員の交流を目的とした会員専用ページ、電腦展示室などのコーナーを設けている。入会申し込みもネット上で受付けている。

電腦展示会は、ネット上で広く一般の方に化石に対する理解を深めてもらうことを目的とし、様々な企画を考え、化石の展示、解説を行っている。現在は「師崎層群の化石」を特集し掲載している。

4) 出版物の出版

機関誌以外の特別出版物を出版するための基金が設けられており、これまでに「金生山化石図鑑」(1974年刊)、「名古屋港の化石図鑑」(1979年刊)、「師崎層群の化石」(1993年刊)の3冊がこの基金から出版されている。特に「師崎層群の化石」は中新世の漸深海帯生物相が網羅的に取り扱われた日本で最初の出版物である。

これ以外にも金生山のペルム紀化石コレクションとして有名な浅見コレクションの図録「浅見化石会館図集」の出版協力、出版社からの依頼による図鑑「フィールドコレクション化石」(北隆館)、地学ガイド「東海の自然をたずねて」(築地書館)の刊行など多くの出版事業に会として携わってきた。また、現在は岐阜県上宝村福地のデボン紀化石を中心とする山腰コレクションの図録制作に協力中である。

5) 博物館設立準備の協力や博物館事業への協力

これまで個人所有の標本を公の場に寄贈するなどの教育、研究活動への協力は地道に続けられていたが、最近になり博物館事業への協力の依頼や志願が増加している。主な内容を以下に記す。

①博物館設立準備の協力

信州新町化石博物館設立参画と展示協力がまず挙げられる。この博物館は当会創設者の故西澤勇氏のコレクション

を礎として、氏の故郷、信州新町に建設された博物館である(図1)。そのようないきさつも平成5年12月の開館に至るまで約5年近い歳月を要して故田中邦雄信州大学名誉教授が設立呼びかけの中心となり、我々も協力を重ねて建設準備が進められた。

また、当会は現在、岐阜県上宝村福地の飛騨自然館山腰標本の整理とこれらのコレクションを用いて設立が予定されている村立資料館計画に携わっている。

②発掘調査への協力

石川県白峰村の白山恐竜パーク白峰で平成5年～11年にかけて当時、館長であった松浦信臣博士を中心に進められた白峰村柳谷一別当崩れ地域の手取層群の発掘調査協力等が挙げられる。

③博物館運営のボランティア補助員

信州新町化石博物館では長野県の会員、小池伯一さんが博物館ボランティアとして研究会や見学会のガイドや博物館内で化石クリーニング、整理といった仕事を手掛けている。

瑞浪市化石博物館でも会員の桑山光夫さんらが同様の仕事や子供教室の講師といった役もこなしている。

6) 中国科学院との交流事業

平成12年から水野吉昭運営委員長を中心に中日新聞社および中日新聞社社会福祉事業団の仲介により中国科学院との交流事業を進めている。これまでのところ現地調査をすませた段階である。今後は障害者や子供たちなどの化石発掘体験等を中日新聞社の協力を得て進める予定である。

7) 化石ニュースの発行

月例会では、前月の化石に関する話題等をまとめたニュースレター「化石ニュース」が配付される。この担当は森協徹さんが行っている。

会員がかかわった最近の学術的業績

当会の研究業績については蜂矢(1992)で既に紹介しているので、ここではそれ以降のものを一部紹介する。

1) 師崎層群関連

- ① 東海化石研究会編, 1993. 師崎層群の化石—愛知県の化石第2集一, 1-297. (中新統師崎層群の化石を網羅した出版物. 特に漸深海帯の化石について詳しく報告されている)
- ② Amemiya, S., Mizuno, Y. and Ohta, S., 1994. First fossil record of the Family Phormosomatidae (Echinothurioida: Echinoidea) from the Early Miocene Morozaki Group, Central Japan. *Zoological Science*, **11**, 313-317. (師崎層群から産出したフクロウニ科ナマハゲフクロウニ属の記載. この科の産出は世界でも初めてである)
- 2) 信州新町化石博物館関連
信州新町化石博物館と協力して, 長野県下に分布する別所累層などの化石の研究に協力.
- ① 大江文雄・小池伯一, 1998. 長野県南安曇郡豊科町にみられる中新統別所累層の魚類群集, 信州新町化石博研報, (1), 33-39. (浅海表層帯から中深海帯の硬骨魚類群集を中新統別所累層から報告し, その地史や古環境を考察した)
- ② 松岡廣繁・牧口貴久・小池伯一, 1998. 長野県南安曇郡豊科町の中部中新統別所累層から産出した鳥類化石と, その化石化作用(予報). 信州新町化石博物館研究報告, (1), 43-48. (ミズナギドリ科鳥類の蹼膜の痕跡を残した趾骨化石の記載とタフォノミーについて)
- ③ 柄沢宏明・成田健・作本達也・小池伯一・水野吉昭, 1999. 長野県の中部中新統青木累層から産した十脚甲殻類. 信州新町化石博物館研究報告, (2), 1-6. (漸深海帯上部の十脚甲殻類7種の記載)
- ④ 川瀬基弘・小池伯一, 2001. 長野県南安曇郡豊科町中谷に分布する中新統別所累層最上部の大型植物化石(第一報). 信州新町化石博物館研究報告, (4), 1-6. (南方系要素7種を含む10種の裸子植物を記載. 国内の中新統から産出記録の少ない三本針葉マツを報告)
- ⑤ 川瀬基弘・小池伯一, 2002. 長野県南安曇郡豊科町中谷に分布する中新統別所累層最上部の大型植物化石(第二報). 信州新町化石博物館研究報告, (5), 1-11. (台島型被子植物化石33種の記載. 常緑樹主体の構成について報告)
- ⑥ 川瀬基弘・小池伯一, 2003. 長野県南安曇郡豊科町中谷に分布する中新統別所累層最上部の大型植物化石(第三報). 信州新町化石博物館研究報告, (6), 1-6. (台島型植物群による別所累層の古環境復元と褐藻植物化石の記載)
- 3) 白山恐竜パーク白峰化石研究会調査報告
- ① 松浦信臣・平山 廉・岡村喜明, 2001. 石川市ノ瀬東方の手取層群及び大道谷の足羽層群からの産出化石. 白山恐竜パーク白峰化石研究会調査報告. 白峰村教育委員会及び白山恐竜パーク白峰, 1-78. (二枚貝, 巻貝, 脊椎動物化石と恐竜などの足印化石等の報告)
- 4) その他
その他, 古生物学への貢献の大なるものを一部紹介する.
- ① Setoguchi, T., Tsubamoto, T., Hanamura, H. and Hachiya, K., 1999. An early Late Cretaceous mammal Japan, with reconsideration of the evolution of tribosphenic molars.

Paleontological Research, **3**, 18-28. (熊本県御船町の上部白亜系御船層群から会員がみつけたセノマニアン期の有胎盤哺乳類大白歯化石について. 日本列島で最初の中生代哺乳類の報告)

- ② Azuma, Y., Arakawa, Y., Tomida, Y. and Currie, P. J., 2002. Early Cretaceous bird tracks from the Tetori group, Fukui Prefecture, Japan. *Memoir of the Fukui Prefectural Dinosaur Museum*, (1), 1-6. (福井県和泉村の下部白亜系手取層群から会員がみつけたアジア最古の鳥類足印化石についての報告. この標本は現在, 福井県立恐竜博物館に展示されている)
- ③ 佐藤 正・蜂矢喜一郎・水野吉昭, 2003. 岐阜県荘川村の手取層群から産出したジュラ紀末期—白亜紀初期アンモナイト. 瑞浪市化石博物館研究報告, (30), 151-166. (手取層群御手洗層から会員がみつけたアンモナイトの報告. この発見により御手洗層の時代がジュラ紀中期からジュラ紀最末期—白亜紀最前期に訂正された)
- ④ 佐藤 正・蜂矢喜一郎・水野吉昭, 2003. 岐阜県根尾村の美濃帯から下部ジュラ系(プリンスバッキアン上部)アンモナイト *Canavaria* の発見. 瑞浪市化石博物館研究報告, (30), 147-149. (日本で5例目の付加帯由来アンモナイトの報告)

現在の問題点と今後の展望

後継者問題

我々の会には10~20歳代の会員がほとんどいない. 会員の年齢構成は, 40~50歳代が中心となっている. 年齢構成からいえばこの問題はそれほど差し迫ったようには感じない. しかし, この世代の殆どが高校地学部出身者という経歴を考えると我々の会のみならず, 古生物学の将来にも陰りを感じざるを得ない. 近年の受験科目での高校地学の比重低下が全国的に高校地学部を絶滅に近い状態に追いこんでいる. 絶滅の理由はもちろんそれだけではない. 化石が採れなくなった, 学外指導の管理や学業との両立の難しさからクラブ活動を積極的に行ないにくい等々, 理由は複合的である. かつての高校地学部員の多くは我々の会を含む多くの研究グループに参加して化石の採り方, 地質図の見方, 論文の読み方など比較的専門性の高い知識を身につけ, フィールドを経験した上で大学に進学して, 専門家への道を歩むのがむしろ一般的であった. そして, 専門家への道を選ばなかった者の多くがアマチュア研究グループ発展に大きく寄与したのである. 高校における地学教育の危機は, 地質学や古生物学の将来を確実に蝕む.

会の方向性と今後の展望について

我々の会の事業は前述のごとく大きく2本柱に分けられる. 1本は月例会を中心とした集會事業, もう一本は出版事業である. 集會事業は都市型とは言うものの, 時間的距離の制約を受けるために全国の会員の方々に満遍なく参加

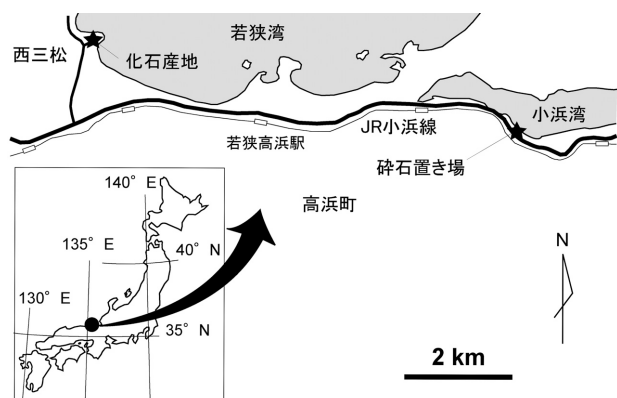


図2. 西三松碎石場周辺の地理。

いただくことが難しい。一方、出版事業は全国の会員の方々へのサービスを比較的平等に行ないやすい。

さらに現在、新入会員のほとんどはWEBサイトからの方々である。そのために会員層はこちらの思惑を超えて全国に広がりつつある。こうなると事業の比重はどうしても出版ヘシフトせざるを得なくなるのではないだろうか。私は現在機関誌の取材のために地方の会員を訪れる機会が増えている。今後の展望としては編集も含めた機関紙への参加という形で全国の方々に会員になっていただき、その交流を通して、より多くの古生物学的新知見を世に出したいというものである。

化石産地紹介

化石産地：福井県大飯郡高浜町西三松の三畳系難波江層群(図2)。

この産地は公共事業(ふれあいの浜辺整備事業)に伴う工事中の現場とその残土碎石置き場である(事業会社名:吉田開発株式会社)。休日等稼動していないときには、現場で頼めば現場が危険な状態でない限り、快く採集させてくれた。また、工事のおかげで大きなブロックで、しかも、新鮮な風化の少ない標本を採集できる。さらにこの残土碎石等はこの現場の東西約10kmほど道路沿いの農地埋め立てや港湾の埋め立ての至る所に使われている。我々はこのような場所からも多くの化石を採集している。平成15年10月現在も作業は続いているので化石の採集は可能であるが、現場関係者とのトラブルや落石による事故などで化石採集が禁止されたりすることがないよう、現地では細心の注意を払っていただきたい。

*吉田開発株式会社と高浜町役場(教育委員会)の御厚意によって、この化石産地の紹介記事が掲載されました。この化石産地は採石場ではなく露頭整備が目的の現場です。露頭自体を崩す事で整備の見直しが生じる可能性もあります。露頭からの化石の採集は極力控えて碎石からの採集を中心におこなって下さい。また、現場は落石などの危険が

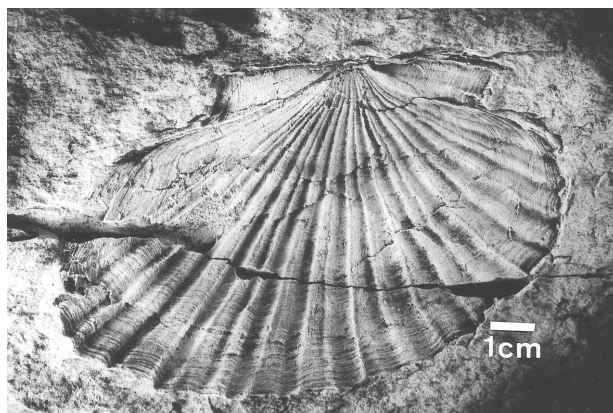


図3. *Tosapekten suzukii nabaensis* Nakazawa.

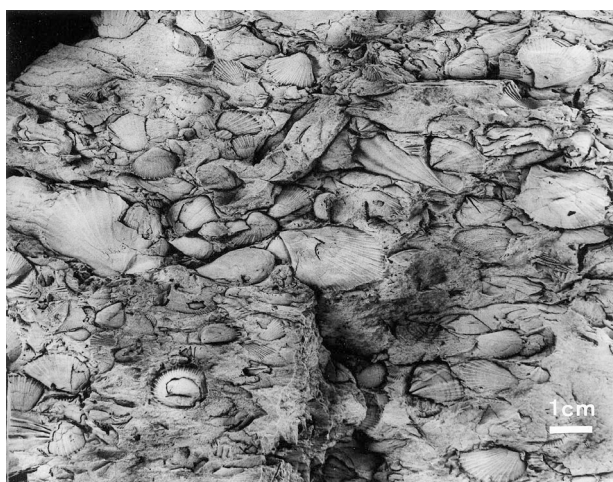


図4. 二枚貝化石の産状. 三畳紀の海底の様子が伺える。

伴います。くれぐれも事故のないように細心の注意を払うことをお願いします(編集委員会)。

三畳紀系難波江層群の化石

西三松付近に分布する難波江層群の化石についての研究はNakazawa(1952, 1954, 1956, 1961)に詳しい。そこからみつかると *Halobia*, *Tosapekten* などの貝類や *Paratrachyceras* といったアンモナイトなどの化石から、その時代は三畳紀後期カーニアン階とされている。ここからみつかると貝化石を俯瞰してみると *Halobia* を除き、三畳系の汎世界的な示準化石はほとんどみつからない。古生代からの系譜を持つイガイ科、ミノイガイ科などの貝類に混じり、三畳紀になり新たに出現したイタボガキ科やイタヤガイ科などの貝類が多いことに気づく。ここでの花形はイタヤガイ科初期グループの一つとされる *Tosapekten* であろう(図3)。高知県から報告されたことに由来する土佐の名はまさに日本の三畳系を代表するにふさわしい二枚貝類と言えよう。その姿形も新生代のイタヤガイを想起させるような大きさと概形

をもち、放射肋は大変にエレガントである。手掌大の *Tosapecten* が合弁状態で漆黒の岩肌に貼り付いている現場の様は壮観で、このような産地ならではでなかるうか。掘り出された大型の岩盤一面に *Mytilus*, *Praechlamys*, *Oxytoma*, *Pseudolimea* といった貝類が散らばる様子はさながら三畳紀の海底を彷彿とさせてくれる (図4)。

○連絡先 〒456-0006 名古屋市熱田区沢下町9-21 美彩社内
TEL 052-871-8386 FAX 052-882-4552
WEBサイト URL <http://www5a.biglobe.ne.jp/fs/>

文献

- 蜂矢喜一郎, 1992. 化石同好会便り, 東海化石研究会. 化石 **52**, 28-37.
Nakazawa Keiji, 1952. A Study on the Pelecypod-Fauna of the Upper Triassic Nabae Group in the Northern Part of Kyoto Prefecture, Japan Part 1 Pectinids and Limids. *Mem. Coll. Sci. University, Kyoto*, [B], **20**, 95-106.
Nakazawa Keiji, 1954. A Study on the Pelecypod-Fauna of the Upper Triassic Nabae Group in the Northern Part of Kyoto Prefecture, Japan. Part 2 Bakevellids. *Mem. Coll. Sci. University, Kyoto*, [B], **21**, 213-222.
Nakazawa Keiji, 1956. A Study on the Pelecypod-Fauna of the Upper Triassic Nabae Group in the Northern Part of Kyoto Prefecture, Japan. Part 4 *Cardinioides*, *Homomya*, *Pleuromya* and others, Supplement and Brief Summary. *Mem. Coll. Sci. University, Kyoto*, [B], **23**, 231-253.
Nakazawa Keiji, 1961. Early and Middle Triassic Pelecypod-fossils from the Maizuru Zone, Southwest Japan. *Mem. Coll. University, Kyoto*, [B], **27**, 249-291.

